

令和5年度 文化庁 日本語教育人材の研修プログラム普及事業

児童生徒等に対する日本語教師（初任）研修報告

実施機関名	公益社団法人 日本語教育学会
事業名	子どものための日本語教育研修(子ども初任研修)
研修実施地域	北海道・東北ブロック、南関東ブロック、近畿ブロック
事業実施期間	令和5年4月～令和6年2月
研修受講者数及び研修修了者数	研修受講者90名中、研修修了者84名

■ 事業概要

(1) 本事業の目的

2020-2022年度に公益社団法人日本語教育学会が文化庁委託事業として実施した「児童生徒等に対する日本語教師初任者研修プログラム普及事業」をもとにしつつ、人材育成と研修プログラムの普及の両立を図る事業を目指し実施する。具体的な目的は次の3点である。

①児童生徒等への日本語教師研修：学校あるいは地域支援の現場で、外国人児童生徒等の日本語教育が行える人材を育成する。

②各地域の支援団体との連携研修：各自治体がそれぞれの地域特性やニーズに応じて、主体的・自立的に研修プログラムを活用して研修が実施できる仕組みと体制作りを行い、各地域の支援団体との連携研修を実施する。

③研修事業の持続可能な展開のためのデジタル情報基盤の整備：上記①②を支えるための情報資源を開発し、研修生相互のネットワーク構築と協働活動支援のためのプラットフォームを整備する。これらのデジタル情報基盤の運用により、各地域の団体が研修を自立的に実施できるよう、支援に取り組む。

以上、「教師研修」×「地域連携」×「情報基盤整備」の総合的な事業展開を通して、マイノリティである子どもたちのエスニシティやアイデンティティを大切に見つめながら教育・支援を行う初任日本語教師を育成し、地域における児童生徒等への日本語教育の充実に貢献する。そして、地域の団体が主体的に研修を実施するための持続可能な仕組みづくりを目指す。

■ 事業概要

(2) 取組の内容

【研修】

北海道・東北ブロックブロックでは弊会が直接研修を実施し、南関東ブロック、近畿ブロックでは児童生徒の日本語教育に関する研修を実施予定の地域支援活動団体と連携して研修を実施した。連携による研修では、弊会がこれまでの関連事業（2020-2022初任研修）で開発したプログラム・教材・方法に関し、コーディネータを派遣して提供することで研修の輪を広げ持続可能な展開を支援する。一方、連携団体は、受講者を招集（募集）し、地域の課題や受講者のニーズに応じてプログラムを具体化して研修を運営・実施した。なお、本研修は全面オンラインで実施した。

【その他関連する取組】

研修事業の持続可能な推進と研修受講生への支援を目的に、プラットフォームHimawariの拡充と、研修受講用LMSの開発に取り組んだ。具体的には、動画教材やその資料等のリソース提供と、予習や復習を支援するための解説やアクティビティの設置、利用方法を提供するランディングページなどを設けた。以上を通し、児童生徒等に対する日本語教師研修を行おうとする地域の団体が、それぞれの実情に応じてこの研修プログラムを実施するためのサポート・リソースセンターの役割を担う情報基盤整備を行った。

■ 事業概要

(3) 実施体制

- ①研修プログラム実施委員会：正副委員長及び各ブロックのコーディネーターから構成し、研修プログラム全般の統括を行う。下部組織にタスクフォースの委員会として、普及ネットワーク情報基盤整備委員会、事業評価委員会を配置し、事業全体の一貫性を担保しつつを運営を行う。
- ②正副委員長会議：事業全体を統括する会議として正副委員長会議を開催する。正副委員長会議は、事業全体の計画、調整にあたりるとともに、研修受講者募集、選考に責任をもつ。
- ③地域ブロックチーム：3ブロックそれぞれで、コーディネーター、地域の支援団体代表、講師、研修補助者からなる実施チームを編成する。地域ブロックチームが主体となり、学会と地域の支援団体がそれぞれ役割を分担し研修を運営する。
- ④普及ネットワーク情報基盤整備委員会：研修に役立つ情報コンテンツの作成、受講者が自律的に研修に参加するための情報交流・学びの共有の機会などを設けるためのプラットフォームの整備を行う。
- ⑤事業評価委員会：評価計画の立案、検討を行い、それに基づき評価を行い、その結果を研修プログラム実施委員会に報告する。

■ 各研修の概要

1 研修の目的と特徴

(1) 研修の目的・ねらい

外国人児童生徒等の背景や言語・学習環境、各地の受入れ・指導体制を十分に理解し、キャリア支援や社会参加という視点をもって日本語を子どもたちの生活・学習に関連付けて教えられ、マイノリティである子どもたちのエスニシティやアイデンティティを考慮した教育を行うことができる人材を育成する。

(2) 研修の特徴

●弊会が直接実施した北海道・東北ブロックと、地域の支援団体との連携によって実施した南関東ブロック、近畿ブロックの2タイプの研修を行うことで今後持続可能な研修モデルを提示した。

●研修は、講義（54単位時間）と実習（6単位時間）の計60単位時間から構成される。講義は、動画教材による学習（18単位時間）、課題の遂行（18単位時間）、スクーリング（18単位時間）によって実施し、講義はオンデマンド型研修と対面研修の組み合わせで研修を実施した。オンデマンド型研修は、動画教材による学習と課題の遂行をオンデマンドで実施した。実習は、地域の状況に応じて、オンライン対面研修のみ、あるいは実地対面型とオンライン対面研修の組み合わせで実施した。

2 求められている資質・能力 -シラバス-

本研修のシラバス（科目と項目）と、文化庁文化審議会国語分科会（2019）『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告書）改訂版』の「児童生徒に対する日本語教師【初任】の資質・能力との対応関係を示す。初任【児童生徒】に関しては該当する教育内容を含む（表のAは児童生徒に対する日本語教師【初任】の資質能力の対応項目、Bはその教育内容）。

シラバスと「資質・能力」(文化審議会国語分科会2019)・評価票項目の対応

	No.科目	項目	A	B
第1クール	1.外国人児童生徒等の背景・現状・課題1、2（6単位時間）	(7) 外国人児童生徒等の現状と課題 (8) 外国人児童生徒等の社会的・文化的背景 (9) 外国人児童生徒等施策	知識 (3) 態度 (1) (4)	①外国人児童生徒等の現状 ②外国人児童生徒等に対する教育施策 ④地域の現状
		(10) 地域の現状と課題（外国人集住地域・散在地域） (11) 学習権・不就学 (12) 多文化共生	知識 (3) 態度 (4)	
	2.外国人児童生徒等の支援体制とネットワーク1（3単位時間）	(13) 地方自治体の受け入れ体制 (14) 学校の教育体制 (15) 地域の支援体制	知識 (3) 技能 (7) 態度 (3)	②外国人児童生徒等に対する教育施策 ③学習環境作り ⑤学校・地域・家庭の言語環境と言語使用 ⑫異領域との協働
第2クール	2.外国人児童生徒等の支援体制とネットワーク2（3単位時間）	(16) 地域のリソースと社会的ネットワーク (17) 保護者との連携・協力 (18) エスニック・コミュニティ	知識 (1) 技能 (6) 態度 (2) (4)	⑥多文化家族と子供の文化適応 ⑧教育・発達心理学
		(19) 異文化適応 (20) 異文化間能力 (21) 自文化中心主義・文化相対主義	知識 (1) (2) 態度 (5)	
	3.外国人児童生徒等の文化適応1、2（6単位時間）	(22) 文化間移動とアイデンティティ (23) 生育環境 (24) 社会化	知識 (1) 知識 (2) 態度 (2)	

2 求められている資質・能力 -シラバス-

第3クール	4.外国人児童生徒の言語習得と認知発達1、2 (6単位時間)	(25) 発達段階と言語習得 (26) バイリンガリズム (27) 母語・継承語・第二言語	知識 (4) 技能 (5)	⑤学校・地域・家庭の言語環境と言語使用 ⑦言語習得と認知発達 ⑧教育・発達心理学
		(28) 生活言語能力と学習言語能力 (特別支援のニーズを含む) (29) リテラシーの発達 (30) 言語能力の測定 (筆記テスト、DLA等)	知識 (4) 技能 (5) 態度 (2)	
第4クール	5.外国人児童生徒等の日本語教育のコースデザイン1 (3単位時間)	(31) コースデザイン (32) 「特別の教育課程」による日本語指導 (33) 評価の対象と方法	知識 (5) 技能 (1) 技能 (5)	②外国人児童生徒等に対する教育施策 ⑨日本語指導のコースデザイン
	5.外国人児童生徒等の日本語教育のコースデザイン2 (3単位時間)	(34) 初期指導 (サバイバル日本語・日本語の基礎) (35) 中期指導 (技能別日本語) (36) 日本語と内容 (教科等) の統合学習 (JSLカリキュラム等)	知識 (5) 技能 (1) (2) 技能 (3)	
	6.外国人児童生徒等の日本語教育の方法と実際1、2 (6単位時間)	(37) 事例分析 (38) 子どもの日本語教育の方法1 (幼児・小学校低中学年の子ども対象) (39) 子どもの日本語教育の方法2 (小学校高学年以上の子ども対象)	知識 (4) 技能 (1) (3) 技能 (6)	
	(40) 教材・教具の活用1 (体験型教材・教具) (41) 教材・教具の活用2 (教科書等の活用・著作権) (42) 教材・教具の活用3 (ICT)	知識 (4) (5) 技能 (4) 態度 (3)		

2 求められている資質・能力 -シラバス-

第5 ク ー ル	6.外国人児童生徒等の日本語教育の方法と実際3、4 (6単位時間)	(43) 子どものための音声指導 (44) 子どものための文字指導 (45) 子どものための文法指導	知識 (4) 技能 (2)			
		(46) 子どものための語彙指導 (47) 子どものための文章・談話指導 (48) 言語生活	知識 (4) 技能 (2)			
		7.社会参加のための日本語学習支援1 (3単位時間)	(49) キャリア教育 (50) ロールモデル (51) 市民性教育		知識 (2) 技能 (8) 態度 (1)	①外国人児童生徒等の現状 ④地域の現状
第6 ク ー ル	7.社会参加のための日本語学習支援2 (3単位時間)	(52) 進路選択支援1 (進学) (53) 進路選択支援2 (就労) (54) 社会活動への参加支援	知識 (3) 技能 (8)	⑫異領域との協働		
		8.外国人児童生徒等のライフコースと日本語教師の成長 (6単位時間)	(55) ライフコース (56) エンパワーメント (57) 人権・社会的正義・公正さ		知識 (2) 技能 (7) 態度 (4)	③学習環境作り ⑫異領域との協働 ⑪内省
			(58) 実践の共有 (59) 対話と省察 (60) 専門家との連携・協力		技能 (6) (7) 態度 (5)	
実習 (6単位時間)	(1) オリエンテーション (1単位時間) (2) 授業見学 (1単位時間) (3) 指導案作成 (1単位時間) (4) 模擬授業・実習 (2単位時間) (5) 振り返り (1単位時間)	技能 (1) (2) (5) 態度 (1)	⑩参与観察・教育実習 (模擬授業を含む) ⑪内省			

3 全体の研修スケジュールと体制

(1) スケジュール 研修期間：8月1日～2月28日（7か月間）

期間を6のクールに分け、各クールの最終日にスクーリングを実施した。
第6クール終了（1月28日）後、1か月間はslackを利用して交流の期間を設けた。

スクーリング等	北海道・東北	南関東	近畿
オリエンテーション	3ブロック合同で実施 8月7日（月）19:00-20:00		
スクーリング1	8月26日（土） 13:00～16:00	8月27日（日） 9:30-12:30	8月26日（土） 13:00-16:00
スクーリング2	9月16日（土） 13:00-16:00	9月24日（日） 9:30-12:30	9月16日（土） 13:00-16:00
スクーリング3	10月14日（土） 13:00-16:00	10月15日（日） 9:30-12:30	10月14日（土） 13:00-16:00
スクーリング4	11月11日（土） 13:00-16:00	11月12日（日） 9:30-12:30	11月11日（土） 13:00-16:00
スクーリング5	12月9日（土） 13:00-16:00	12月10日（日） 9:30-12:30	12月9日（土） 13:00-16:00
スクーリング6	1月28日（日） 13:00-16:00	1月14日（日） 13:30-16:30	1月27日（土） 13:00-16:00
実習 (6単位時間分)	①-③スクーリング3～5の 後 ④-⑥1月6日（土） 13:00-16:00	①-③スクーリング3～5の 後 ④-⑥ 1月14日（日） 9:30-12:30	①-③スクーリング3～5の 後 ④-⑥ 1月6日（土） 13:00-16:00

3 全体の研修スケジュールと体制

(2) 研修実施体制

本年度は、今後のプログラム普及とそれに基づく研修の本事業終了後の持続可能性のための布石として、日本語教育学会と外部団体との共同開催とした。共同開催を希望する団体を公募したが、南関東ブロックはNPO法人メタノイアと、近畿ブロックは株式会社京都民際日本語学校と共同実施をすることになった。北海道東北ブロックは希望団体がなかったため、日本語教育学会単独で実施した。

研修プログラム実施委員会：

正副委員長、各ブロックコーディネータ

- ・ 研修に関する全体的方針
- ・ 対外的問題への対処、予算運用判断
- ・ 修了認定の最終決定

研修ブロックチーフ会議（＝研修運営委員会）：

研修運営委員会委員長、各ブロックコーディネータ、共同実施団体チーフ

- ・ スケジュール・研修プログラムの実施状況の把握・管理
- ・ 受講者の出欠・辞退等に関する管理方法の決定、
- ・ 問題・課題の共有・対応方法の検討
- ・ 評価方針の決定・評価結果の集約

各ブロック会議：

コーディネータ、共同実施団体チーフ、講師、事務補佐スタッフ

- ・ 受講者の出欠管理
- ・ 各ブロックの研修の実施（課題の達成度の確認スクーリング、実習の実施等 詳細は各ブロックの報告を参照）

実施委員会正・副委員長

副委員長
＝研修運営委員会委員長

各ブロックコーディネータ

コーディネータ
講師

- ・ 研修内容・方法の検討
- ・ 課題達成度の確認
- ・ 実習の内容構成・実施
- ・ 評価

共同実施団体
チーフ

- 事務補佐スタッフ
- ・ 出欠管理
- ・ 問い合わせ対応
- ・ オンライン参加補助

3 全体の研修スケジュールと体制

(3) 共同実施団体代表・コーディネータ・講師

共同実施団体・代表	南関東ブロック 近畿ブロック	NPO法人 メタノイア 山田拓路 京都民際日本語学校 住田伸夫
コーディネータ	北海道・東北ブロック 南関東ブロック 近畿ブロック	市瀬智紀（宮城教育大学） 齋藤ひろみ（東京学芸大学） 和泉元千春（奈良教育大学）
講師	北海道・東北ブロック 南関東ブロック 近畿ブロック	今泉智子（山形大学） 高橋亜紀子（宮城教育大学） 菊地泰子（仙台市立大志高校） 河野あかね（つくばインターナショナルスクール） 高柳なな枝（地球っ子クラブ2000） 牧原紀子（宇都宮大学） 伊澤明香（関西大学） 浦久仁子（堺市立三原台中学校） 河合大輔（公益財団法人箕面市国際交流協会）

本事業関連委員会

研修プログラム実施委員会／事業評価委員会 委員長：中川祐治（大正大学）

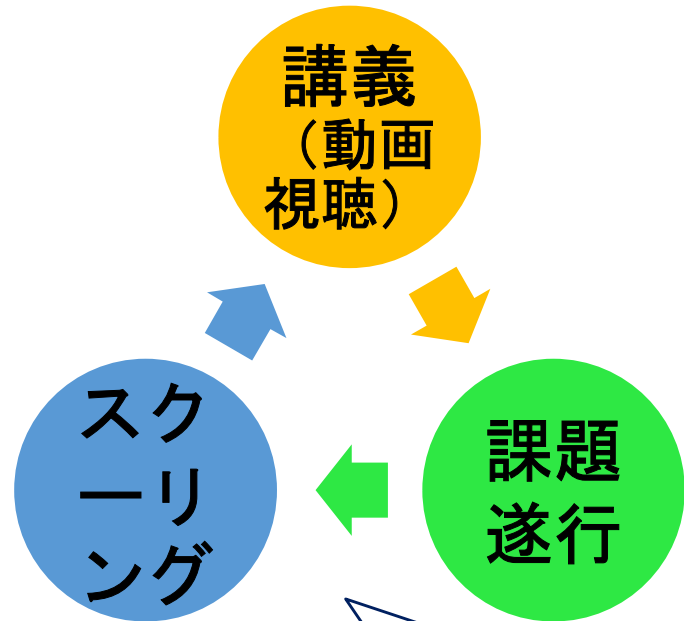
研修運営委員会 委員長：齋藤ひろみ（東京学芸大学）

普及ネットワーク情報基盤委員会 委員長 田中祐輔（青山学院大学）

3 全体の研修スケジュールと体制

(4) 教育内容と方法

講義54単位時間を6クールとして実施する。各クール（9単位時間）は「講義講義視聴（3単位時間）→課題遂行（3単位時間）→スクーリング（3単位時間）」のサイクルで実施した。これに並行して、後半、実習を6単位時間実施した。



実習 地域の日本語教育・支援現場の見学・模擬授業等
→子どもの日本語教育の現状把握、実践力の向上を図る

講義（動画視聴） 各クール3本 （1本 15分）	講義に関わる 課題の遂行	スクーリング （Zoom）
<p>例) 第1クール： ・外国人児童生徒等の背景・現状課題 ・外国人児童生徒等の支援体制とネットワーク</p> <p>動画配信システム VIMEOへアクセスして視聴。</p>	<p>各ブロックの講師が課題を提示。 （課題は動画に示されたものではなく、各ブロックで設定する）</p> <p>課題提示：第1回はオリエンテーションで、第2回以降はブロック毎に、slackとスクーリングで提示。</p>	<p>課題を共有しながら、講義内容について理解を深める。グループでの話し合い、講師から補足情報の提供。地域の状況に応じた教育・支援の方法を検討する。</p> <p>同時双方向型のオンラインセッション。 情報共有のための各種アプリを利用。</p>

4 研修の実施状況

(1) オリエンテーション 2023年8月7日 (19:00-20:00)

本研修のオリエンテーションを、研修開始時に全受講者を集めて行った。内容は、全ブロックに共通する研修の内容と実施方法、修了日程や、利用するオンラインツールについて、修了認定の要件等に関する情報の提供と、各ブロックの講師・受講者間の挨拶・確認で構成した。(ウェブ会議システム Zoom による実施)

全体で確認した事柄	ブロック毎の活動
<ul style="list-style-type: none"> ・研修のねらい ・研修スケジュール(6クール制、実習6単位時間) ・研修の内容及び活動構成 動画視聴と課題への取り組みとスクーリングによる学び 実習の活動構成とオンラインによる模擬授業 ・動画の視聴方法・オンラインツールの利用方法(Zoom・slack) ・修了要件・認定証の発行 ・留意点 プライバシー、著作権等の倫理と通信環境整備の重要性 	<ul style="list-style-type: none"> ・講師・受講者の自己紹介(確認) ・第1クルールの課題と課題提出方法 ・各ブロックのslackへの招待 <p>受講者募集時に示した要件と留意点に関しては、受講者全員より同意書の提出を求めている。</p>

<提示資料の一部>

子ども初任コース 研修のねらい

外国人児童生徒等の背景や言語・学習環境、各地の受入れ・指導体制を理解して、**キャリア支援や社会参加という視点**をもって子どもたちの**生活・学習に関連付けて日本語を教えられ、マイノリティである子どもたちのエスニシティやアイデンティティを考慮した教育・支援を行うことができる人材を育成することです。**

北海道・東北、南関東、近畿地域での研修を通じて、**各地域の児童生徒に対する日本語教育・支援の充実に貢献**することを目指します。

文化審議会国語分科会(2019)の「児童生徒に対する日本語教師【初任】に求められる資質・能力」及び「研修における教育内容」に基づく

修了要件・認定証

- ・研修に2/3以上参加していること。
- ・提出課題、及びスクーリングの活動において、目標を概ね達成できていること。
- ・実習(6単位)に参加して課題を提出していること。

1単位時間ごと、出欠を取る。
25分以上遅刻・早退した場合、その単位時間は「欠席」。

評価票を利用し、資質・能力について自己評価を実施

- 1回目: 第1回スクーリングの前
- 2回目: 第3回スクーリングの後
- 3回目: 第6回スクーリングの前

文化庁に受講者・修了認定者を報告します。希望者については、文化庁がウェブサイト上で修了者(被認定者)を公開します。

自身の資質・能力や、本研修の成果をメタで捉え、課題を設定し、その後の実践に役立てましょう。

4 研修実施状況

北海道・東北ブロックの例（1）

研修実施上の工夫

- ①動画教材で児童生徒支援について体系的に学び、課題に取り組むことによって、地域の実態や個別のケースにあわせて考察した。課題は、受講生の実態やニーズに合わせて講師が調整して出題した。
- ②事前にスクーリングのための準備や進め方について、受講生とSlackを通じてやり取りを行った。スクーリングでは、指導経験や居住地の異なる受講生が、共に課題を検討するなかで、学びの深まりや気づきが見られた。グループワークではエクセルやPadletの共有機能を使用して全体で情報を共有した。
- ③児童生徒についてオンラインであっても実感を持って取り組めるように、外国人児童生徒オンライン支援の場を実習で活用した。

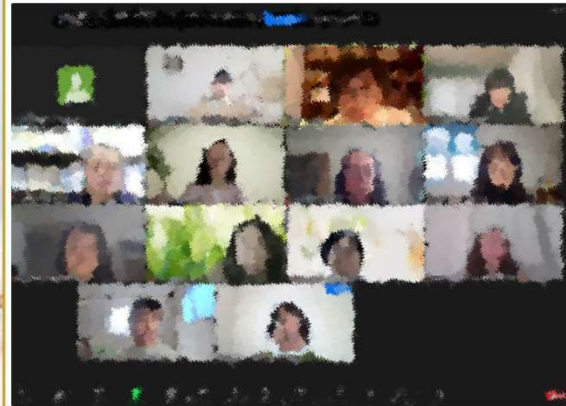
本ブロックの研修スケジュールの詳細

課題実施期間（指示～提出期限日）、講師の会議（ブロック会議）、スクーリング実施日

課題の指示	課題提出締切	ブロック会議	スクーリング・実習の実施		
8月 5日（土）	8月19日（土）	8月21日（月）	スクーリング 1	8月26日（土）	13:00～16:00
8月26日（土）	9月 9日（土）	9月11日（月）	スクーリング 2	9月16日（土）	13:00～16:00
9月16日（土）	9月30日（土）	10月 2日（月）	スクーリング 3	10月 7日（土）	13:00～16:00
10月 7日（土）	10月21日（土）	10月23日（月）	スクーリング 4	10月29日（土）	13:00～16:00
10月29日（土）	11月11日（土）	11月13日（月）	スクーリング 5	11月18日（土）	13:00～16:00
		12月11日（月）	実習指導	1月 6日（土）	13:00～16:00
1月 6日（土）	1月21日（土）	1月23日（月）	スクーリング 6	1月28日（土）	13:00～16:00

4 研修実施状況 北海道・東北ブロックの例 (2)

「23文化庁初任子ども研修 北海道・東北ブロック」への寄せ書き (1/1)



付箋 支援 抱えそうな課題=水色の付箋 課題 困難



特徴的な活動

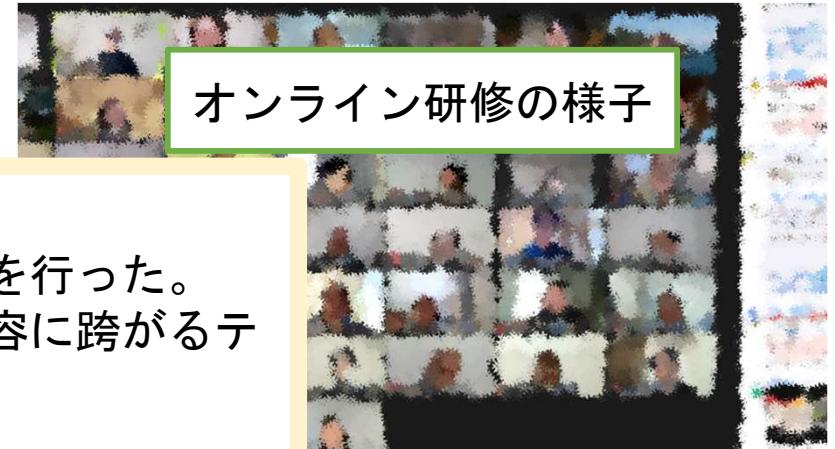
- ブロック会議で毎回のスクーリングでの活動において提示する教材の絞り込みを行ない、できるだけ具体的な指示になるよう心掛けた。
- スクーリングでは、動画やテキストで学んでいることを前提に、講師の語りを少なくし、受講生の気づきを重視した。
- 実習では、外国人児童生徒のイメージを得るために日本語ボランティア教室に参加した。
- 実習最終回では、自分が実際にイメージした児童生徒に向けた語り（シナリオ）を考えた実習を行った。

左上：修了時の受講生の抱負

右上：受講時の様子

下図：Padletでのグループ活動

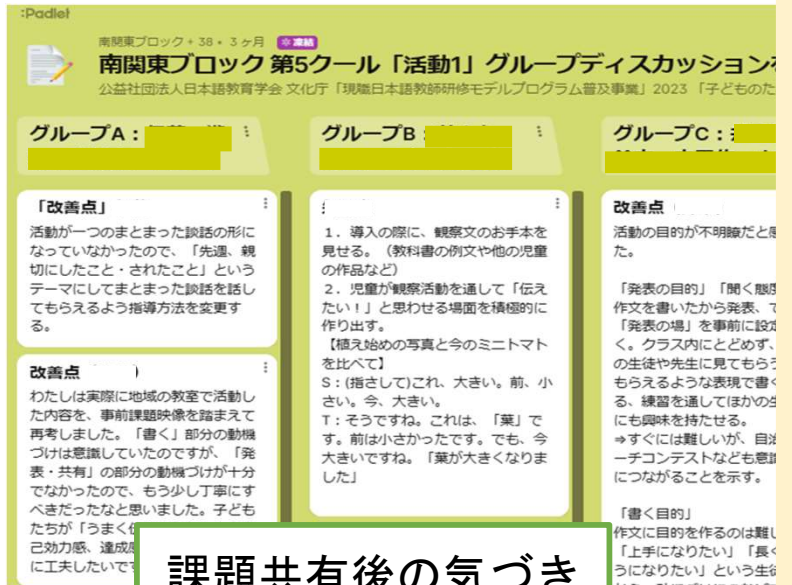
4 研修実施状況 南関東ブロックの例（1）



オンライン研修の様子

研修実施状の工夫

- ①研修動画（各クール3本）の内容の理解のために次の工夫を行った。
 - ・3本の動画内容を関連づけて理解できるように、動画の内容に跨がるテーマで課題を設定した。
- ②課題を円滑に遂行できるよう次の支援を行った。
 - ・課題に応じて提出用にテンプレートを作成して利用できるようにした。
 - ・課題遂行のために利用できる情報のアクセス先を紹介した。
- ③各受講者（43名）が取り組んだ課題を共有し、互いに参考にできるよう、スクーリングでは課題を次の様に取り扱った。



課題共有後の気づき
（アプリ利用）

- ・講師から参考になるものをピックアップして紹介
 独創性があるもの
 クールのテーマに迫っているもの
 学習者や現場の理解に基づくもの
 「当たり前」を問い返すもの
- ・スクーリングの同グループメンバーの課題に事前に目を通す（グループ編成を事前通知）。スクーリング当日のグループ活動では意見交換、質問を中心とする。
- ・課題の共有を通して気づいたことをアプリで共有

課題1 あなたの地域の外国人生徒等の高校進学への

高校入学前の支援（特別措置・特別入学枠・選抜方法）

高校入学後の支援（学校や地域の活動・進路支援等）

地域の現状を調べてみて、考えたことや解決すべきこと

課題 テンプレート例

課題2 ライフコース上の課題を考慮したエンパワーメント

ライフコースを築いていく上での課題

エンパワーメントするための支援や活動、イベントの内容

【どのような年齢層の子ども、どのような人を対象とするか】

【どのよう

【支援、活動、イベントの内容】

4 研修実施状況

南関東ブロックの例 (2)

現場の実際から理解を深める工夫

講師、共同実施団体、受講者から、各クールの内容に応じて、学校・地域の日本語支援の実際と子どもの実態を紹介した。

地域にあるリソースやネットワーク例

つながりと日本語@日光
日:月に3,4回(2h)
場所:公民館
目的:宿題をする&遊ぶ
参加者:外国ルーツの子とその友だち、保護者



南関東ブロック 第3クール
母語の積極的な取り組み例
児童・生徒の背景、言語環境

- 年少から12年生(3歳~18歳)、1学年1クラス(20~25名)、全306名(2023.10.6現在)
- 国際バカロレア(IB)認定校(PYP, MYP, DP)のインターナショナルスクール
- 約20~30カ国にルーツ、つながり、関わりのある子ども達
- 第一言語または優位言語が英語という学習者が大多数、日本語授業以外は英語で学習
- 英日・バイリンガル、トリリンガル、クアドリンガル、……マルチリンガル(多言語話者)
- 家庭で日本語を使用する者⇄日本語授業以外では日本語を使用する場面が全くないという者
- 日本語授業は全員必修、クラス内には様々な日本語力の学習者が混在
- トランスランゲージング→持っている全ての言語リソースを使用して、日本語力を伸ばす

⇒日本語プログラムでは、多様な言語文化背景の学習者が助け合い、尊重し合う協働活動が多数

活動イメージと学習指導案「日直スピーチ出選手を紹介」

<出身> とがしさんは新潟出身です。	<身長> 167cm	<プレーしているチーム> 千葉JETS	<性別> ボーイ						
<table border="1"> <tr> <td>1. 対象児童生徒</td> <td>* 一人 / 複数人 (←どちらかを選んで) * 選択した児童生徒の番号 (C)</td> </tr> <tr> <td>2. 授業名</td> <td>日直スピーチで選手を紹介</td> </tr> <tr> <td>3. 授業デザイン</td> <td>言語形式中心 / 内容・意味中心 (←どちらかを選んで)</td> </tr> </table>				1. 対象児童生徒	* 一人 / 複数人 (←どちらかを選んで) * 選択した児童生徒の番号 (C)	2. 授業名	日直スピーチで選手を紹介	3. 授業デザイン	言語形式中心 / 内容・意味中心 (←どちらかを選んで)
1. 対象児童生徒	* 一人 / 複数人 (←どちらかを選んで) * 選択した児童生徒の番号 (C)								
2. 授業名	日直スピーチで選手を紹介								
3. 授業デザイン	言語形式中心 / 内容・意味中心 (←どちらかを選んで)								
<どんな人ですか> とがしさんは小学校1年生の時にミニバスケットボールを始めました。	<どんな活動ですか> 中下担任	内容面の目標							

世界のお正月

目標
日本語の目標 (具体的な言語事項も明示)
 <読む> 選手についての記事等を調べて読み、
 <話す> 自分の言葉で伝える。
 <書く> メモを書く
 言語事項: ○○は子供のころ○○でした。/○○がまろが○○です。

Q1. 日本では、なぜ、お正月に学校も仕事も休みなのですか。
 Q2. 日本では、お正月には、どんなお正月の準備をしますか。
 Q3. お正月には、だれと何をして過ごしますか。

https://www.jishujinja.or.jp/shougatsu/world/

実習の授業例 (オンラインによる模擬授業)

共同実施団体の教室を撮影した動画で、支援活動・児童生徒が学んでいる様子を紹介。この児童・生徒を対象として指導計画を作成して、模擬授業(オンライン)を実施

4 研修実施状況

近畿ブロックの例 (2)

○研修実施上の工夫

- ①近畿圏を超えて広範囲で活動（あるいは居住）している受講者同士が闊達に意見共有・交換できるよう、スクーリングではグループワークの進め方を工夫したり懇談会を実施したりした。また提出された課題はGoogle Drive上に格納し、講師だけでなく受講者間でも共有した。
- ②受講者の参加状況をみながら、スクーリング内で動画内容のポイント整理や補足（学校教育に関する情報等）を行った。また過度な負担がかからないようスクーリングの課題・内容を工夫した。
- ③実習では、国際教室の授業を動画で視聴した。またオプションプログラムとしてセンター校、地域の教室の見学の機会を設け、見学参加者から他の受講者に情報共有する時間も設けた。

○その他の成果

- ・研修終了後、受講者有志によって同窓ネットワークがSlack及びLine上に構築され、講師を含めほぼ全受講者が参加してすでに情報交換が始まっている。
- ・共同実施機関関係者にとっても、子ども日本語教育の内容、研修運営の方法を学ぶ機会となった。今後、地域等にそれを還元していくことが期待される。

▽スクーリング資料

6. まとめ

社会参加のための日本語学習

43) キャリア教育

- ◆社会関係資本からの情報収集の支援
- ◆アイデンティティ形成の支援

44) ロールモデル

- ◆ロールモデルのタイプとキャリア発達
- ◆重要な他者の存在
- ◆居場所の必要性


45) 市民性教育

- ◆社会的課題に対してボランティア活動
- ◆外国にルーツをもつというかけがえのない価値を認め、その価値を共有しながらどのように社会と関わり、自分のキャリアを形成していくのかまでを視野に入れつつ、日本語の力を磨いていく必要がある

学習指導案・・・授業の計画書

- ・連続した指導の中で(形成的評価)
- ・子どもの今を見つめ、目標を見失わない
- ・「主体的・対話的で深い学び」
- ・「言語活動の充実」
- ・授業の進め方のシナリオ
- ・授業改善に活かす

AUカードを参考に



言葉の力の
弱い子ども
への支援

▽ Slackを使った交流



5 研修前後のフォローアップ

研修修了後のネットワーキング構築の工夫

受講者に選考結果の通知とともに受講案内を送付し、オリエンテーションで受講の仕方、アプリの使い方などを説明した。困難がある場合には各ブロックでSlackを通して個別に対応した。

研修中のフォローアップ

北海道・東北	Slack上で「質問コーナー（チャンネル）」を設け、随時、質問や相談に応じた。受講生の地域別にグループ編成を行って、同地域の受講者間の連携を図れるようにした。スクーリング修了後はLineでグループを形成した。
南関東	Slack上に「相談チャンネル」と「お知らせチャンネル」を設け、自身が現場で感じている疑問や悩みなどを相談したり、イベントや交流会情報などを共有できるようにした。 スクーリング終了後に、任意で交流会を実施し、それぞれの疑問などについて話し合う機会を作った。
近畿	Slack上で、随時質問屋相談を受け、対応していた。 スクーリング後に、zoomのブレイクアウトルームを利用して、懇談の時間を設け、スクーリングで十分話せなかったことや、自身の現場や取り組みについて話し合った。また、オプションの実習（中学校・国際交流協会の参観）について、参加した受講者から報告などもあった。

研修修了後のネットワーキング構築の工夫

3つのブロックとも、受講者が主体的にネットワーキングを進められる機会を提供した。

SlackやLineなどで、互いに交流できるSNS空間を構築して、交流している。

過去の受講者へのフォローアップ、ネットワーキング

2020年度の九州・沖縄ブロック受講者、2021度の近畿・北陸ブロック受講者、2022年度の南関東ブロックの受講者が、交流会を実施している。その他、各年度の受講者が任意でネットワーキングを継続しており、子どもの日本語教育関連の動向・イベント情報の共有や、求人の呼びかけ・情報共有が行われている。

6. 評価

研修の評価方法

子ども初任コースの3ブロックのコーディネータにより検討し、3ブロックとも、以下の表の通り評価を行った。

評価の結果

評価方法	
評価対象	①各クールの課題レポート ②各回の振り返り ③実習のパフォーマンス ④実習指導案の改訂版・振り返りレポート ⑤自己評価票
評価方法	①②は各クールの担当講師による評価、③④⑤は全講師で分担して評価。 提出の有無、内容で得点化した上で、スクーリング・実習でのパフォーマンス等を加味し総合的に評価し、ブロック内の講師全員で協議して評定を決定した。

非常に高い目標達成度	21名 (23.3%)
十分な目標達成度	63名 (70.0%)
目標達成度不十分 (修了を認定せず)	2名 (2.2%)
中途辞退	4名 (4.4%)

非常に高い目標達成者が21名、十分な目標達成者が63名で、両者を合わせて84名 (93.3%) である。受講者の目標の達成度は全体として非常に高い。なお、認定されなかった受講者は、研修辞退者が4名、出席時間の不足者が2名であった。

南関東では、令和3年度までにはほとんど見られなかった中途での辞退 (体調不良、家族の事情等) が4名あった。長期の研修であり、こうした辞退をも一定程度想定しておくべきであろう。なお、当初から全く連絡が着かないケースもあり、研修回数を重ねる中で、当初の受講者とは認識の異なる受講者層の存在も、意識する必要があると考えられる。

修了認定

上記評定のB以上の84名が修了を認定された。

研修プログラム実施委員会にて、上記の評価及び出席時間数に基づき審議し、認定した。

7 研修概要 普及ネットワーク情報基盤整備

研修事業の持続可能な仕組みと体制作りのための情報基盤構築

公式ウェブサイト『ひまわり』 <https://himawari-jle.com/>

研修参加者用 講義閲覧サイト <https://training.himawari-jle.com/>

オンライン研修（LMS） <https://lms.himawari-jle.com/>

LMS利用開設LP <https://lms.himawari-jle.com/lp/>

普及ネットワーク情報基盤整備委員会は、各地域の日本語教育人材や日本語教育機関関係者が、それぞれの地域特性やニーズに応じて、主体的・自立的に研修プログラムを研修を受講し連携できる研修事業の持続可能な仕組みと体制作りのための情報基盤構築に取り組みました。

委員会は、情報資源の検討と開発、および、研修受講生・研修修了生相互のネットワーク構築と協働活動支援のためのプラットフォーム整備の検討と開発を行い、発注先業者と連携しながらデジタル情報基盤構築とその運用支援に取り組みました。

コンテンツは、各地域で自律的に研修を実施するときに有用な情報として、本プログラムのリソース（動画・ハンドブックなどの教材、研修実施時のワークシート等）、研修受講者の理解促進のためのクイズや開設、受講状況、各地の研修の取り組み例のシェアページなどで構成しました。研修受講生・研修修了生のネットワークに関しては、本プラットフォームのコンテンツを視聴することで得られた学びを共有したり、関係づくりを促進できるようにプラットフォーム上にコミュニティを設けました。

以上を通して、本研修の教育資源や研修成果を蓄積し、ネットワークを構築することにより、研修事業の持続可能な発展に資するサポート・リソースセンターとして機能させる活動に取り組みました。

4 研修概要 普及ネットワーク情報基盤整備

① 講義動画の再生数向上の取組

公式Youtubeチャンネル『ひまわり』

<https://www.youtube.com/@himawari-jle>



研修受講生がプレイリストの作成や各種チャンネルを閲覧・利用できるように、また、学習のプロセスを確認し学びを支援できるように、各動画のサムネイル作成やチャンネル設定を行い、講義全体の研修受講（予習・復習）の向上と、復習活動に必要な情報整備を図り研修実施の質向上と学びの支援に取り組みました。

動画ID	動画タイトル	再生数	再生率	再生回数	再生率	再生回数	再生率
1	外国人児童生徒等の背景・現状・課題 (1) #1	112,164	82.16%	2,816	2.0%	174	0.1%
2	外国人児童生徒等の背景・現状・課題 (2) #4	88,475	7.19%	2,816	2.4%	442	0.4%
7	外国人児童生徒の言語習得と認知発達 (1) #19	87,935	2.17%	14,284	16.0%	188	0.2%
6	外国人児童生徒等の文化適応 (2) #16	29,345	4.32%	22,347	76.2%	138	0.5%
3	外国人児童生徒等の支援体制とネットワーク (1) #7	28,345	4.32%	22,347	76.2%	147	0.5%
5	外国人児童生徒等の文化適応 (1) #13	27,845	3.71%	22,347	80.3%	438	1.6%
8	外国人児童生徒の言語習得と認知発達 (2) #22	24,845	3.71%	22,347	90.4%	718	2.9%
9	外国人児童生徒等の日本語教育のコースデザイン (1) #28	23,845	3.71%	14,284	60.0%	434	1.8%
10	外国人児童生徒等の日本語教育のコースデザイン (2) #29	20,845	3.71%	14,284	68.6%	330	1.3%

研修受講生の復習活動などが頻繁に見られる講義

1. 外国人児童生徒等の背景・現状・課題 (1) #1
2. 外国人児童生徒等の背景・現状・課題 (2) #4
7. 外国人児童生徒の言語習得と認知発達 (1) #19
6. 外国人児童生徒等の文化適応 (2) #16
3. 外国人児童生徒等の支援体制とネットワーク (1) #7
5. 外国人児童生徒等の文化適応 (1) #13
8. 外国人児童生徒の言語習得と認知発達 (2) #22
1. 外国人児童生徒等の背景・現状・課題 (1) #2
10. 外国人児童生徒等の日本語教育のコースデザイン (2) #28
9. 外国人児童生徒等の日本語教育のコースデザイン (1) #25



4 研修概要 普及ネットワーク情報基盤整備

② 令和5年度研修参加者向け動画視聴・ハンドブック閲覧サイトの構築

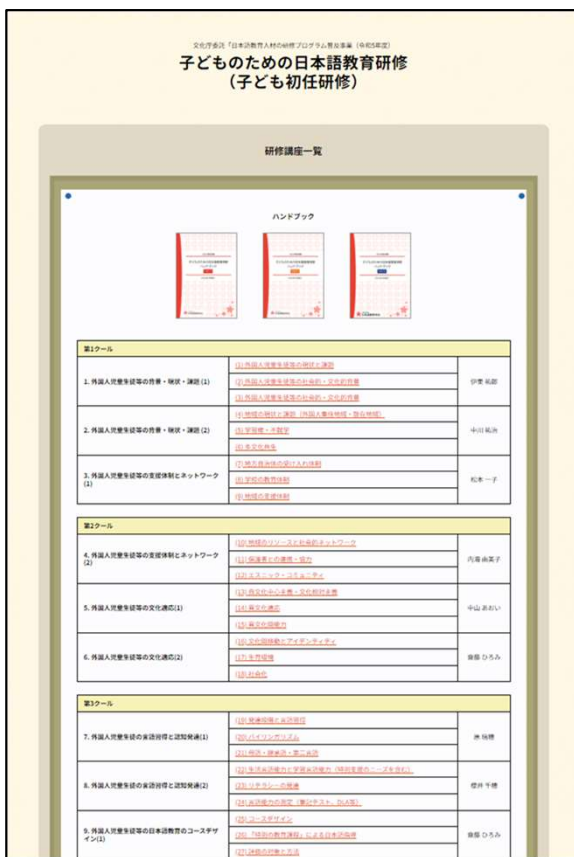
令和5年度研修参加者用視聴サイト

<https://training.himawari-jle.com/>



視聴用アカウント	
メール	info@himawari-jle.com
Password	Himawarijle1234!

研修受講生向けの教材閲覧サイトを構築しました。令和5年度研修受講生向けに一般に先行して動画・ハンドブックを公開、視聴環境を整備し、研修の実施体制の整備に取り組みました。研修の進捗に沿った講義動画の配信やハンドブック資料の配信を行うことで、段階的な学びをサポートする活動に取り組みました。



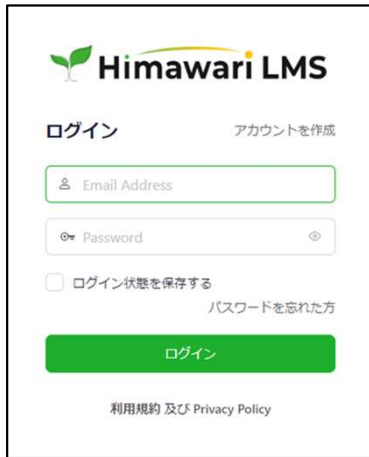
研修受講生の復習活動などが頻繁に見られる講義	再生回数
1	7. 外国人児童生徒の言語習得と認知発達(1) #19
2	9. 外国人児童生徒等の日本語教育のコースデザイン(1) #25
3	1. 外国人児童生徒等の背景・現状・課題(1) #1
4	10. 外国人児童生徒等の日本語教育のコースデザイン(2) #28
5	8. 外国人児童生徒の言語習得と認知発達(2) #22
6	7. 外国人児童生徒の言語習得と認知発達(1) #21
7	8. 外国人児童生徒の言語習得と認知発達(2) #24
8	8. 外国人児童生徒の言語習得と認知発達(2) #23
9	10. 外国人児童生徒等の日本語教育のコースデザイン(2) #30
10	7. 外国人児童生徒の言語習得と認知発達(1) #20

4 研修概要 普及ネットワーク情報基盤整備

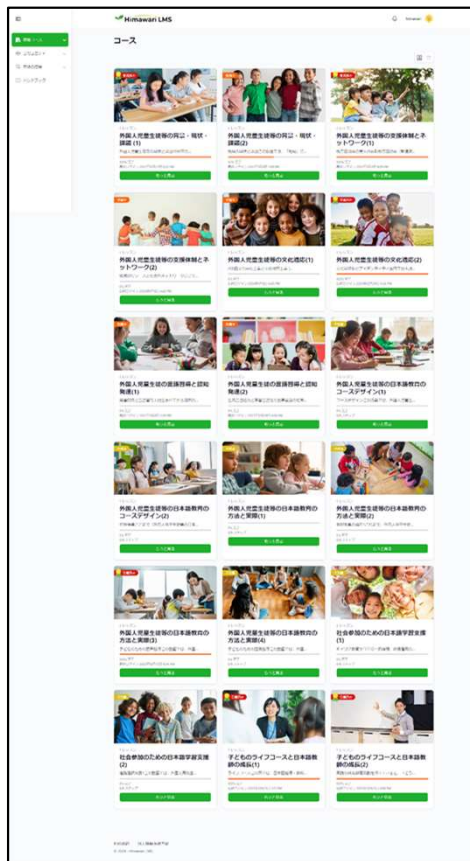
③ 持続可能な研修を目的とした地域や経済的制約に捉われない研修用LMSの構築

Himawari LMS

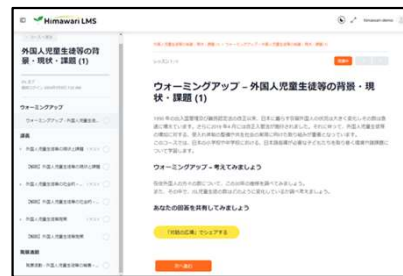
<https://lms.himawari-jle.com/>



抽選などの事情で研修に参加が叶わなかったり、時間や場所の制約から本研修の受講が困難な全国の教師・サポーターの方々のために、令和4年度に制作した動画・ハンドブックを教材として活用し、地域や時間の制約にしばられない、どなたでも研修受講可能なLMSを構築しました。



講座一覧 (全18講座)



① ウォーミングアップ



② 講義の視聴



③ 確認テスト (択一・複数選択・穴埋め)



④ テストの解説



⑤ 発展活動

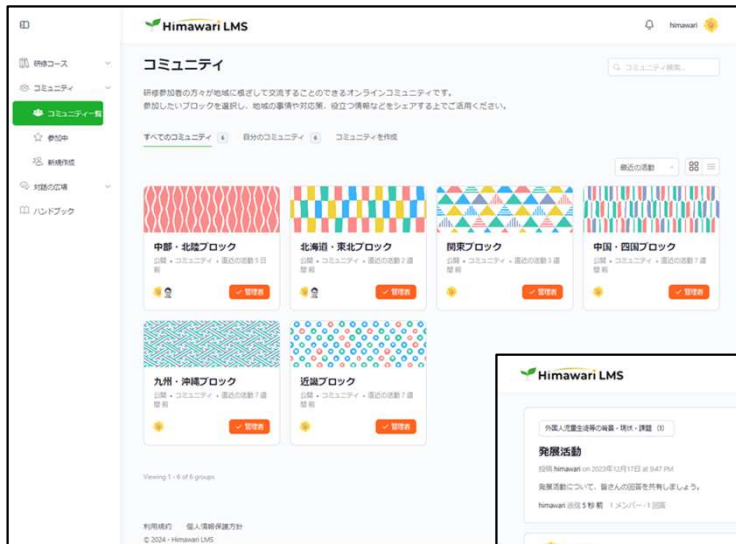


講座を受講すると、ポートフォリオ (受講記録) が発行されます

4 研修概要 普及ネットワーク情報基盤整備

③ 持続可能な研修を目的とした地域や経済的制約に捉われない研修用LMSの構築

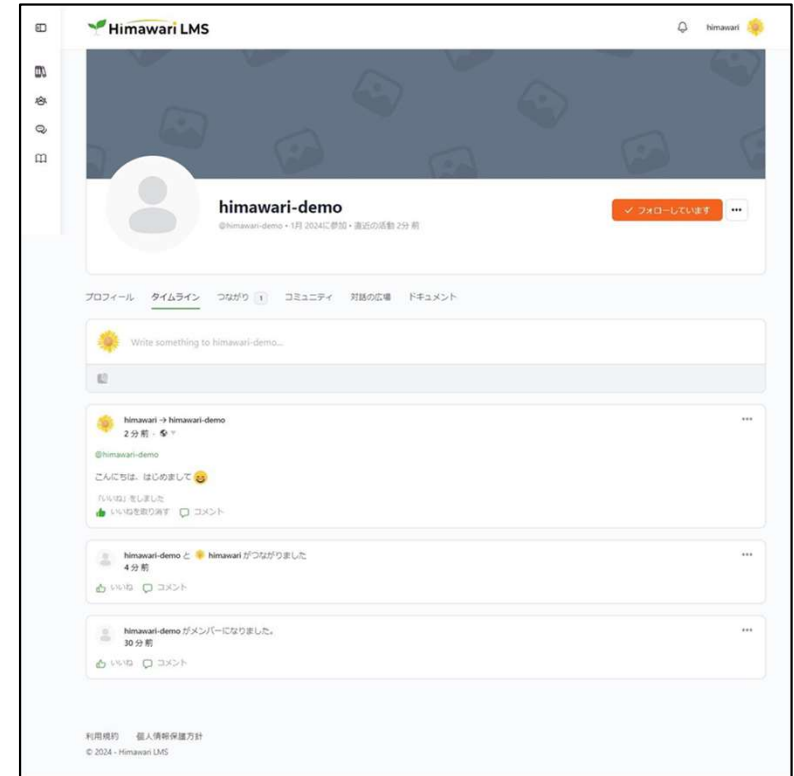
全国の教師ネットワーク構築と交流のための全国ブロックのコミュニティやフォロー（つながり）システム、さらにウォーミングアップ・発展活動の回答を共有し知見を広めるための対話の広場（対話）を設置しました。



交流用の全国コミュニティ



対話の広場（ウォーミングアップ・発展活動の共有）



つながり（フォローシステム・ユーザータイムライン・いいね）

4 研修概要 普及ネットワーク情報基盤整備

③ 持続可能な研修を目的とした地域や経済的制約に捉われない研修用LMSの構築

本研修事業が目標とする17の「日本語教師に必要な知識・技能・態度」の習得について、その全体像と、各講義とコースを通して何をどのように学ぶことができるのかを明示するページを設置しました。また、受講生の方々が、ご自身が今どの段階にあり、これからどのようなトピックを学ぶことができるかについて把握できるよう、受講進度と17項目とがどのように対応し、現在どの時点まで受講が進んでいるかが視覚的に表示されるようプログラムを設定しました。

知識	技能	態度
<p>国や、外国人施策・入国管理政策受入れの背景に精通する動向を把握している。</p> <p>に繋がる学校等教育機関の受入れについて知識を有し、地域のニーズを把握している。</p> <p>言語発達を含む)の特長と、生育環境の変化による影響(認知・アイデンティティ形成)について理解している。</p> <p>プロセスについての知識を有し、キャリア交際の観点から将来を展望して日本語指導が果たす役割を理解している。</p>	<p>児童生徒等の言語の能力(日本語及び母語)を、多様な角度から把握・評価することができる。</p> <p>児童生徒等の様々な特性(年齢・能力・文化的背景等)に応じて、日本語の学習活動を設計し、実施することができる。</p> <p>指導計画に即し、子どもの実態に応じて、教材などを工夫した指導・学習支援を行うことができる。</p> <p>内容(教科等)と日本語とを統合する考え方で、児童生徒の生活や学習と日本語学習を関連づけ、学習参加の支援することができる。</p>	<p>ライフコースの交際の視点から、児童生徒等の日本語教育・学習支援の在り方を考え、実践しようとする。</p> <p>保護者、地域の支援者、学校としての日本語教育・支援の充実を図る。</p> <p>複雑な事情を抱える多文化背景等の社会参加を促進し、その発展を促そうとする。</p> <p>指導する立場であることや多文化背景であることが、少数派の児童生徒とその保護者にとって困難な場面をもちふことを認識し、自身の行動を反省し、学習・支援に臨もうとする。</p>

下記の講座を受講しましょう!

- 外国人児童生徒等の文化適応(1)
- 外国人児童生徒等の日本語教育のコースデザイン(1)
- 外国人児童生徒等の日本語教育のコースデザイン(2)
- 外国人児童生徒等の日本語教育の方法と実際(1)
- 外国人児童生徒等の日本語教育の方法と実際(2)
- 外国人児童生徒等の日本語教育の方法と実際(4)

講座を複数受講していくごとに、知識や技能スキルを獲得していける(ゲーミフィケーション)

日本語教師としての資質・技能

知識	技能	態度
<p>国や地域の外国人の状況や、外国人施策・入国管理政策等の外国人児童生徒等の受入れの背景に精通する動向を把握している。</p> <p>児童生徒等の日本語習得(言語発達を含む)の特長と、生育環境の変化による影響(認知・アイデンティティ形成)について理解している。</p> <p>児童生徒等の成長発達(言語発達を含む)の特長と、生育環境の変化による影響(認知・アイデンティティ形成)について理解している。</p> <p>児童生徒等の社会化のプロセスについての知識を有し、キャリア交際の観点から将来を展望して日本語指導が果たす役割を理解している。</p> <p>児童生徒等の言語習得(日本語及び母語)と言語運用の特性に関する知識を有している。</p> <p>児童生徒等に対する日本語の指導計画・指導方法についての知識を有し、子どもの生活・学習活動に精通した日本語教育の方法を理解している。</p>	<p>児童生徒等の言語の能力(日本語及び母語)を、多様な角度から把握・評価することができる。</p> <p>児童生徒等の様々な特性(年齢・能力・文化的背景等)に応じて、日本語の学習活動を設計し、実施することができる。</p> <p>指導計画に即し、子どもの実態に応じて、教材などを工夫した指導・学習支援を行うことができる。</p> <p>内容(教科等)と日本語とを統合する考え方で、児童生徒の生活や学習と日本語学習を関連づけ、学習参加の支援することができる。</p> <p>実践を分析的に振り返り、各課のための検討を行うことができる。</p> <p>児童生徒等を育り豊く社会の中に、自身の役割を位置付け、教育・支援の内容や方法を決定し、実施することができる。</p> <p>児童生徒等の将来を展望し、学校や地域、家庭などの活動において、教育・支援を担うことができる。</p>	<p>ライフコースの交際の視点から、児童生徒等の日本語教育・学習支援の在り方を考え、実践しようとする。</p> <p>保護者、地域の支援者、学校関係者と協働し、地域団体としての日本語教育・支援の充実に貢献しようとする。</p> <p>複雑な事情を抱える多文化背景の児童生徒を支援し、児童生徒等の社会参加を促進し、その発展を促そうとする。</p> <p>指導する立場であることや多文化背景であることが、少数派の児童生徒とその保護者にとって困難な場面をもちふことを認識し、自身の行動を反省し、学習・支援に臨もうとする。</p>

<p>ポートフォリオ</p> <p>外国人児童生徒等の背景・現状・課題(2)</p> <p>取得 2024年1月8日</p>	<p>ポートフォリオ</p> <p>外国人児童生徒等の支援体制とネットワーク(1)</p> <p>取得 2024年1月4日</p>	<p>ポートフォリオ</p> <p>外国人児童生徒等の文化適応(2)</p> <p>取得 2023年12月29日</p>	<p>ポートフォリオ</p> <p>外国人児童生徒等の背景・現状・課題(1)</p> <p>取得 2023年12月21日</p>
<p>ポートフォリオ</p> <p>子どものライフコースと日本語教師の成長(2)</p> <p>取得 2023年12月13日</p>	<p>ポートフォリオ</p> <p>子どものライフコースと日本語教師の成長(1)</p> <p>取得 2023年12月13日</p>	<p>ポートフォリオ</p> <p>外国人児童生徒等の日本語教育の方法と実際(3)</p> <p>取得 2023年12月12日</p>	

研修受講ポートフォリオ



履修記録 (PDF)

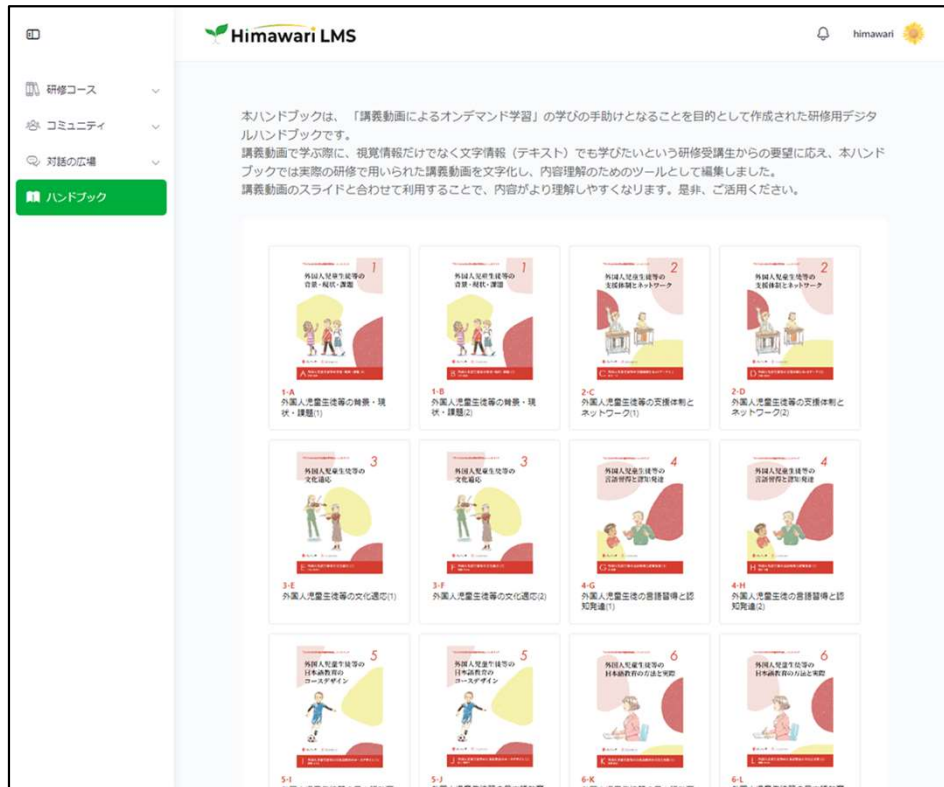
4 研修概要 普及ネットワーク情報基盤整備

③ 持続可能な研修を目的とした地域や経済的制約に捉われない研修用LMSの構築

ハンドブックの活用

<https://lms.himawari-jle.com/handbook/>

研修ハンドブック (Vol.1~3) を、LMSの各コースに対応させた形でデザインし、学習者がコースの内容に沿って必要なものを選んで利用できるように工夫しました。また、動画視聴後に改めて重要な事項への理解を深めたいケースなどに対応できるよう、クイズとハンドブックの該当ページを紐付け、復習できるようにしました。効果的な予習や復習の促進とサポートに取り組みました。



4 研修概要 普及ネットワーク情報基盤整備

③ 持続可能な研修を目的とした地域や経済的制約に捉われない研修用LMSの構築

Himawari LMS 利用促進LP

<https://lms.himawari-jle.com/lp/>

LMSの学習の流れの紹介、習得できる知識等や講座、全国コミュニティの紹介など登録・利用を支援するためのLP（ランディングページ）を設置しました。



7 修了証

- 修了証 サンプル



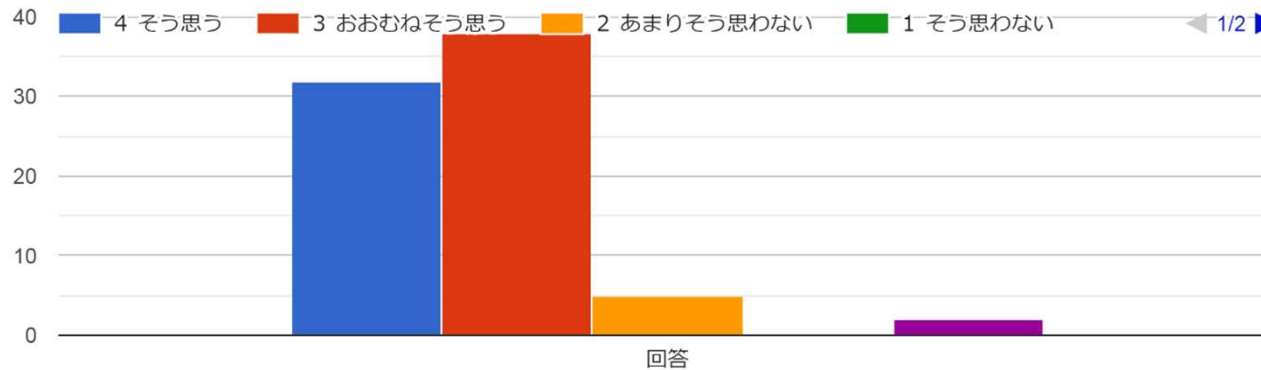
■ 受講生からの評価

研修終了後に受講者に対するアンケートを実施し、77名から回答を得た。質問項目は以下の通り

- ①全体の単位数・時間数（60単位時間）は適切だと思うか（及びその理由）／②講義動画視聴（18単位）＋課題（18単位）＋スクーリング（18単位）＋実習（6単位）の構成は適切だと思うか（及びその理由）／③実習の内容や実施方法について適切だと思うか（及びその理由）／④研修はオンラインで実施したが、その際に使用したZoomは適切だと思うか（及びその理由）／⑤研修はオンラインで実施したが、その際に使用したSlackは適切だと思うか（及びその理由）／⑥課題の量や内容は適切だったと思うか（及びその理由）／⑦スクーリングの内容は適切だったと思うか（及びその理由）／⑧研修はオンラインで実施したが、参加しやすかったか（及びその理由）／⑨動画の内容（項目）について十分に理解できたと思うか（及びその理由）／⑩動画の内容（項目）について十分に満足したか（及びその理由）／⑪課題について十分に取り組んだと思うか（及びその理由）／⑫スクーリングに積極的に参加したか（及びその理由）／⑬スクーリングの内容について十分に理解できたと思うか（及びその理由）／⑭スクーリングの内容について十分に満足したか（及びその理由）／⑮研修を通して他の受講者と十分に交流できたと思うか（及びその理由）／⑯今回の研修を受けて、自身の目標が十分に達成できたと思うか（及びその理由）／⑰今後の児童生徒教育の活動に活かせると思うか（及びその理由）／⑱どうしてこの研修を受けようと思ったか／⑲この研修に参加して何を学ぶことができたか、それは今後どのように活かせると思うか／⑳研修の内容や運営等に関する意見・要望／㉑今後、受講したい研修のテーマ

Q2

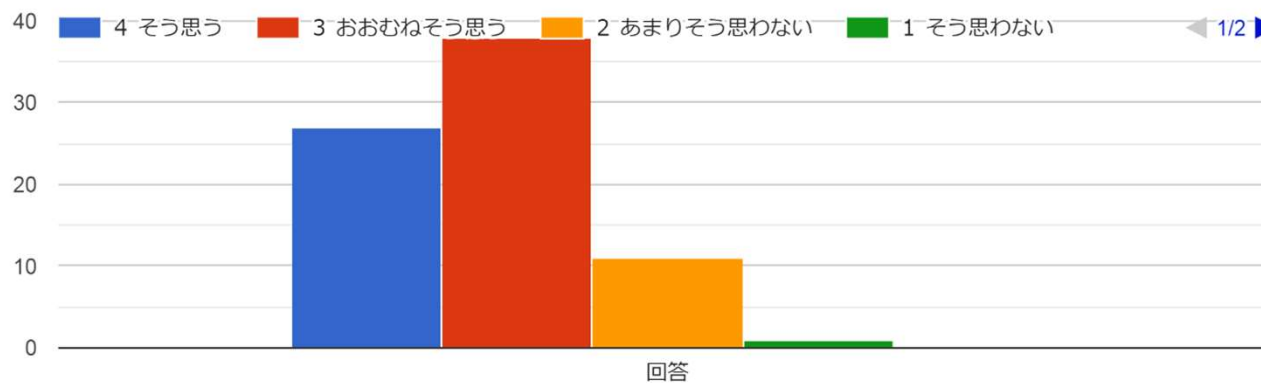
講義動画視聴（18単位）＋課題（18単位）＋スク...）＋実習（6単位）の構成は適切だと思いますか？



【理由】

- ・ 講義とアウトプット、課題の時間のバランスが取れていました。
- ・ 事前に動画視聴で必要事項を学べたので、スクーリングの時間が座学にならず、ほかの受講者から学べる時間が多い研修だったと感じています。

Q3 実習の内容や実施方法について適切だと思いますか？



【理由】

- ・ オンラインでも実際に授業観察ができたこと、それに基づき実習ができたことはとても有益でした。
- ・ ほんとは対面でできればいいかなと思いました。オンラインでももう少し実習にかける時間が長くてもよかったかなと思いました。

1 各ブロックの成果と課題 北海道・東北ブロック

<成果>

- 少人数であったため、最後まで緊張感と連帯感をもって研修を進めることができた。
- 動画教材で児童生徒支援について体系的に学び、課題に取り組むことによって、具体的に知識や技能をみにつけることができた。
- 動画とテキストについて、地域の実態や個別のケースにあわせて思考することができた。
- 動画教材の視聴—課題遂行—スクーリングのサイクルにより、研修による学び場スパイラルに積み上げられた。
- DLAやJSLといった手法技法や、エンパワメント理論など、新たな手法や概念を、具体性をもって認識することができた。
- 外国人児童生徒支援のオンライン教室に参加することによって、児童生徒の様子を実感を持ってとらえることができた。オンライン学習の可能性や、子どもの多様性への対応の仕方に関する多くの示唆を得ることができた。

<課題>

- 実習が平日であったため、実習のオンライン教室の見学に参加できない受講生がいた。DLAの動画をみるとことで代替としたが、実際の児童生徒の様子を観察することには至らなかった。
- 内容が多岐にわたり、外国人児童生徒の把握や学校教育の教科の体系などについて理解するにはかなり時間を要するようであった。理解と実践にはギャップがあり、今後児童生徒の教育実践の場で、体験的に習得することによって学ぶ部分は大きいと考える。

1 各ブロックの成果と課題 南関東ブロック

<成果>

- 外部組織（NPO法人メタノイア）との共同実施により、研修運営が円滑に行われた。具体的には、運営管理スタッフと講師の役割分担の明確化により、各々の担当業務に集中できた。Slack等を利用したオンラインによる受講者への情報提供・課題提出・管理で、的確・即時に対応できた。
- 受講者の負担を考慮し、課題を取り組み易いものにした。また、提出用のテンプレートで課題遂行のイメージを作れるようにした。
- 学校・地域の支援教室の様子や児童生徒のケースの紹介を複数回、また、当事者（もと子ども）による経験談を聞く活動を行ったことにより、講義動画の内容（言語能力、日本語指導の方法論等に関する理論、エンパワーメント、キャリア支援など）に関連づけて 提示し、実際の状況を学んだ情報と 結び合わせた理解を促せた。
- 受講者の多さを考慮し、スクーリングでは提出された課題やグループの検討結果等を、講師の方で選択して、紹介することによって、全体で共有することができた。
- グループ活動では、ワークショップ型・体験型の活動を行ったこと、教員、支援員、ボランティアと多様な立場で構成されたこと、観点を明示したことで、気づきが大きかったようである。
- 後半のスクーリングでは終了後に交流の時間を設けたが（任意）、受講者の現在の問題意識や疑問を気軽に話し合う場となり、講評であった。

<課題>

- グループ活動で感想として聞こえてくるスケジュールのタイトさ、1か月に動画（45分）を3本視聴して3つの課題に取り組む負荷の大きさについては、配慮の必要性がある。
- 実習の模擬授業のあとの振り返り・フィードバックの時間の確保ができず、受講者としてもやりっぱなしの感がある。
- 提出した課題について、個別のフィードバックは、物理的・時間的に実施することが難しいが、その点について、今後の対応を検討する必要がある。

1 各ブロックの成果と課題 近畿ブロック

<成果>

- スクーリングでは近畿圏を超えて広範囲で活動（あるいは居住）している受講者同士が闊達に意見共有・交換をする様子が観察された。また提出された課題はGoogle Drive上に格納し、講師だけでなく受講者間でも共有した。
- 受講者の参加状況をみながら、過度な負担がかからないようスクーリングの課題・内容を工夫した。
- 実習では、国際教室の授業を動画で視聴した。またオプションプログラムとしてセンター校、地域の教室の見学の機会を設け、見学参加者から他の受講者に情報共有する時間も設けた。
- 研修終了後、受講者有志によって同窓ネットワークがSlack及びLine上に構築され、講師を含めほぼ全受講者が参加してすでに情報交換が始まっている。
- 共同実施機関関係者にとっても、子ども日本語教育の内容、研修運営の方法を学ぶ機会となった。今後、地域等にそれを還元していくことが期待される。

<課題>

- 受講者からは動画内容が難しいとの声もあったが、課題やスクーリングで受講者それぞれへのフィードバックの機会が十分にとれない場合もあった。
- 実習では、オンラインで1人15分の模擬授業で行った。模擬授業前後に設けた受講者同士のグループワークでの指導案検討や振り返りを通して学びが深まったという意見があったが、一方で講師からもより詳細なフィードバックがほしかったという声も聞かれた。
- 実習、特に模擬授業の内容や方法についてはさらに検討の余地がある。

2 評価委員会からの評価のまとめ

6名の評価委員から評価を受けた。評価項目、評点の平均（5段階評価）、評言は以下の通り

1-1. 研修について、当初の目標が達成できるように企画計画されていたか（5点）

- ・これまでの実施体制づくりと実績をもとに企画計画は十分なされていたと考える。（評価委員C）
- ・「動画教材による学習と課題の遂行」→「スクーリング」という流れが繰り返される反転授業形式の講義は、内容を標準化することができると同時に、持続可能なモデルとなりうる。（評価委員F）

1-2. 受講者の参加の様子に応じて研修が実施されていたか（4.5点）

- ・垣間見た研修の様子から地域の日本語教育実践者の人材育成に大いに貢献していると感じた。
（評価委員B）
- ・受講者の背景等が異なるので、受講者全員の参加の様子に応じて研修が実施するのは難しいと考えるが、評価を1つ下げた。（評価委員A）

1-3. 事業の目標は最終的に達成されていたか（4.8点）

- ・全般的に計画通り着実に研修が実施されていた。「初任コース」受講者の自己評価表によれば、ほとんどの参加者が研修開始時よりも大きく資質・能力を伸ばすことができている。（評価委員A）
- ・受講者のアンケート結果からは、特に実習については対面での実習を望む声もあり、改善に向けた意見が多くみられた。この点において可能な範囲で今後、検討していく必要性があるように思う。

（評委員者C）

2 評価委員会からの評価のまとめ

2-1. 各クラスの受講者数・講師の配置等は、目標を達成する上で適切であったか（4.7点）

- ・研修の途中の講師の先生の補足や講評が適切でよいと感じた。グループは4人、役割分担が示されていたブロックもあり、スムーズに研修が進んでいた。（評価委員B）
- ・地域により、講師、指導助言者、アドバイザーの人数が異なるが、講師の人数が2名の地域は講師に負担がかかりすぎていないのか、多少気になった。（評価委員C）
- ・スクーリングの目的を達成するために必要な準備がきめ細かくなされており、受講者数・講師の配置は目標を達成する上で適切だと考えました。ただし、配置された講師数でブレイクアウトセッションでの受講者によるグループワークを十分に目配りすることは難しいと思われ、演習補助者のような役割があると学習者の学びや気づきがさらに促進されると思われました。（評価委員D）

2-2. オンライン研修の特性を活かしたものであったか（4.5点）

- ・「オンライン研修だから参加できた」という記述が「アンケート」に複数あり、遠方の人や忙しい人のために必要な形態であると改めて感じました。「Slackやパドレットを使うことは研修の一部」と捉えていた受講生もおり、オンラインの日本語教育実践も視野に入れると、新しい教育実践に使いそうな機能を使ってみることも、研修として意味のあることだと考えます。（評価委員E）
- ・模擬授業についてはおおむね成功に終わり、受講者からはオンラインは心配だったが意外とできたといったコメントが見られたが、やはり対面を望む声は少なからずあった。北海道や東北のように受講者の居住地が広範囲に及ぶ場合はオンラインによる模擬授業は有効な手段であろうが、オンラインと対面の両方の良さや難しさを体験する機会があるとより有益な成果を得られるものと思う。（評価委員F）

2 評価委員会からの評価のまとめ

3-1. プラットフォーム事業について、当初の目標が達成できるように企画計画されていたか

(4.5点)

- ・ Slackを活用するなどし、当初の目標が達成できるように企画計画されるように工夫がなされていると見受けました。(評価委員D)
- ・ 目標とするプラットフォームの形態に沿った情報資源や研修キット、受講者間の情報交流を促す仕組みが企画されていた。(評価委員F)

3-2. コンテンツの内容は事業の目標に適した内容であったか (4.5点)

- ・ 研修終了者のネットワーキングを促す「オンラインプラットフォーム」についてのその運用方法等に課題があると考えられるが、内容としても十分であると考えます。(評価委員A)
- ・ ひまわりにて動画を拝見したり、受講者の感想等も見たりすることができた。LMS も拝見しました。自分の時間に合わせて実施できるのがいいと感じました。(評価委員B)
- ・ 「Himawari LMS 紹介」はLMS の紹介として非常に整ったものだが、受講者目線に対する紹介となっており、各地で本プログラムを実施しようとする関係者が参照する情報としては不足している。今後の蓄積によりプログラム実施の手引きのようなコンテンツが拡充されることを期待する。

(評価委員F)

- ・ 研修受講生・研修修了生相互のネットワーク構築と協働活動支援のためのプラットフォーム整備に向けては、Himawari LMS の「コミュニティ」や「対話の広場」の機能をどのように生かしていくかが今後の課題であると考えました。(評価委員D)

■ 総 括

事業全体の成果と課題【研修】

<成果>

1 運営面

・外部団体との共同実施（南関東・近畿ブロックでの実施）により、講師と運営スタッフの役割が明確となり、組織的・合理的な研修の運営が実現できた。

・SNS上の多様な仕組みを利用して、例えば、提出課題をGoogle Driveに格納して講師・受講者間で見えるようにするなど、情報の伝達・管理・共有が円滑にできた。

2 研修による学習の成果

・講義動画のオンデマンド視聴、課題提出、同時双方向のオンラインスクーリングのサイクルで、研修の学びがスパイラルに蓄積されていくことが確認できた。

・スクーリングでは、講義動画の補足説明や課題の共有のみならず、体験型・ワークショップ型の活動を実施したこと、当事者の体験談を聞く機会を設けたことなどにより、DLAやJSL等の手法や、ライフコース・エンパワメント等の理論など、新たな情報を具体的に事象に関連付けて認識を形成することができた。

・スクーリングの同時双方向のセッションでは、参加者の活動地域は広範囲に広がっているが（北海道・東北ブロック・近畿ブロック）、受講者同士が闊達に意見共有・交換をする場を提供できた。

3 研修の持続可能性に関する成果

・本学会以外の一般団体・組織との協働実施により、本プログラムを活用した研修「経験」の拡張と、他団体による研修実施の「事例」を蓄積できた。

・コーディネータ・講師、スタッフの多くが本研修の経験者で構成した。特に、講師育成コース（令和2～4年度実施）・アシスタント講師・講師と段階的に研修に関わる者もあり、今後の各地域での同目的の研修の実施・運営の大きな人材となることが期待される。

<課題>

・受講生の多くが職業をもって研修に参加しているために、スケジュールのタイトさ課題の負荷は、相当な負担となっている。時間をかけてゆっくりと力量を形成できる異なるタイプの研修などの提供が期待される。

・内容が多岐にわたり、オンラインによる自学自習が全体の2/3を占める。スクーリングでの双方向のセッションはあるものの、子どもや現場の具体的状況や教育方法の実際の理解が十分には深まらないという問題が残る。また、提出した課題や、実習の模擬授業へのフィードバックの時間の確保の難しさもある。オンラインでの実施に関わる、問題として、引き続き検討が必要である。

■ 総 括

事業全体の成果と課題【その他関連する取組】

その他関連する取組による成果としては、1) 第一に、研修受講生の理解促進と復習や予習の支援、さらには、受講をサポートする情報の整備を行うことができた。2) 第二に、場所や時間の制約に縛られずに受講可能なLMSとランディングページを開発することで、各地域で自律的に研修を実施したり、ニーズに即した研修を組み立てる基盤構築を実現することができた。このことは、児童生徒等への日本語教育人材育成と研修事業の持続可能な展開の素地ともなるもので、今年度の事業の目標の一つが達成されたと言える。今後の課題としては、設けられたシステムやプラットフォーム、ネットワークといったデジタル情報基盤の活用方法の発信や、運用促進を行うことが挙げられ、今後も、情報基盤の面からも日本語教育人材の育成に資する支援活動に取り組む必要があるものと考えられる。